

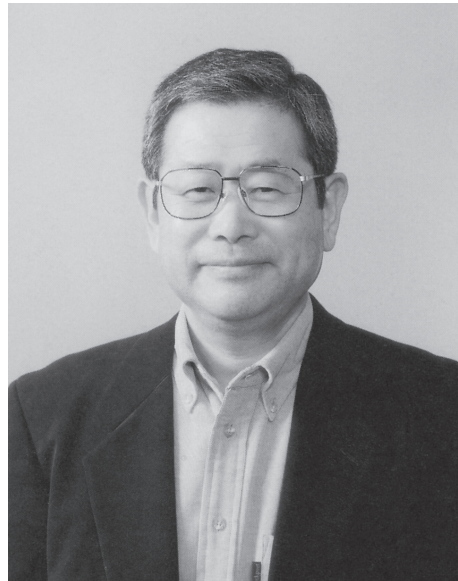


Title	「もっと遠くまで」 真田英彦先生を偲ぶ
Author(s)	小郷, 直言
Citation	大阪大学経済学. 2016, 66(1), p. 111-112
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57213
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



(真田英彦先生名誉教授)

「もっと遠くまで」 真田英彦先生を偲ぶ

真田英彦先生は、1967年に大阪大学の工学部助手として研究と教育を開始されました。以降35年間を大阪大学に勤務され、最初20年間を工学部で、その後15年間を経済学部・経済学研究科で研究および学生の教育指導に尽力されました。大阪大学名誉教授となられ、2016年1月3日ご逝去されました。

先生の工学部時代におけるご専門は通信工学であったのですが、研究を始められた当初から情報通信の研究が近い将来社会科学の分野でも非常に重要になると洞察され、とくに経営システム・情報ネットワークの分野への学問的関心を持ち続けられました。今でこそコンピュータ通信の革命的ともいえる社会的影響の甚大さは誰しもが認めるところのものとなっていますが、先生はこれを1960年代半ばに予見され、以降先見の明をもって情報通信ネットワークの発展に献身的に努力されてこられました。

先生はご自身の主要業績に1964年の修士論文「ダイナミックデータ伝送の研究」を上げられておりますが、この中で、60年代後半に実現された全米のコンピュータ・ネットワーク網であるARPANETに利用されているパケット通信と同じアイデアを示しておられます。現在この方式はInternetへと引き継がれていることは皆様もご承知のとおりです。先生のアイデアは、アメリカでの研究とは独立に、しかも当初から（軍用ではなく）民生用として、かつそれらよりも早くなされた研究であることを鑑みますと、先生のアイデアの偉大さをわかっていただけるのではないかと思います。

パケット交換、分散処理、水平的ネットワークなどの技術的可能性へのコミットメントが社会の複雑性を自立的に制御するために欠かせないことを誰よりも早く気づいておられたに違ありません。こうした裏付けがあったからこそ先生を社会情報学研究へと突き動かしていったのです。これにつけF.ハイエクへの近親感をよく話題にしておられました。工学から経済学・経営学への転身が時代の要請という以上に、ご自身は「もっと遠くまで」という見果てぬ夢を

追い求めさせたのではないのでしょうか。不動に見えた社会の常識や価値観の両端の一方が、遠方に急速に動いていく状況が技術的に可能になるならば、今まで中央値付近にあった常識は揺り動かされ、離されていった方に引きずられていく。真田先生はその離し方を尋常ではないほど引き離そうとされる。そうすることで今までの常識や思考が大きく揺り動かされる事態が訪れる。技術の革新の社会的影響を遠くの先にまで見越したとき、そこに見えてくる世界は、単なる期待ではなく、実現すると確信されていたのです。

真田先生をご存じの方なら、お会いするとき先生はいつも笑顔を絶やさず、落ち着いてゆっくりとお話になり、何事にも動じない安定感を来訪者にお与えになったことに同意いただけるでしょう。この瞬間、居心地の良さを感じ、持ち込んだ相談や話題は、ちっぽけなことに思え、先生との歓談をこの上なく楽しんでいる自分に出会うことができる。近視眼的なテーマは、最初じっくりとほほえみながら聞いてもらっているのであるが、ぽつぽつと頂く示唆に話は思いもよらぬ遠方へと運んでいかれ、遠大なテーマが狭小なテーマの近くに鎮座していたことを思い知らされる。先生は決しておっしゃらないが、もっと先を考え、もっと大胆に思考せよ、自らに科している制約を取っ払ってみては、と言っておられるようで、知らず知らず誘導されていた我が身にはっと気づく。そして、先生の元を離れてしばらく経つと、高揚した自分に驚かされる。安っぽい啓発本とは次元が異なり、研究の醍醐味と気概に圧倒され、芯から啓蒙されたような気持ちにさせられる。発想の自由を何よりも尊ばれ、何事も一旦受け入れるという土俵の広さ、恐怖や権威に動ぜず、己の信じるものは情熱をもって語るが、決して他者にそれを強要しない。だからこそ、先生は多くの卒業生、ゼミ生に愛され続けたのです。そしていまも、これからも皆の心の中に生き続ける。

足腰の不自由が顕著になってきていたにも関わらず、自らが創設された社会情報学会関西支部の研究会で、最近大事だと思っているのは「宗教」であると真剣に私に訴えておられたのが、未だに気になっている。これをご自身の心境を吐露されたと解すべきではない。ついに知的上部構造や形而上学にまで至ったのでもない。先生は常に科学研究を「(歴史を遡ることを含めて) もっと遠くまで」見据えるよう我々にけしかけられてきたことを勘案すべきであり、宿題を課されたのではないだろうか。情報の実在性にとことんこだわり抜かれたのであるから。

研究は六文銭だけを残して、人生を賭するだけの価値のある素晴らしくまたやり甲斐のある仕事であると真田先生は最後に我々に穏やかに語りかけて、三途の川も悠々自適に渡って行かれたことでしょう。真田先生の研究室から多くの優秀な研究者、そして第一線で活躍されている真田ゼミ卒業生がおられます。私が先生の追悼文を書かせていただきましたのは、ただ最後まで先生の近くでお話をする機会をたくさん頂いたからにすぎません。この幸せをかみしめ、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

2016年3月

(2015年3月大阪大学大学院経済学研究科退職 小郷直言)